

まなていのごよみ 2008 増刊号

発行・まなてい (代表 アカシヤスユキ) 〒854-0094 長崎県諫早市本明町 1617-1 TEL 090-2084-0898

Vol.1 No.8 (Ver. 1.0)

『地球暦』『丸一年カレンダー』に出合ったおかげで 『○暦 2009』誕生!……感謝。

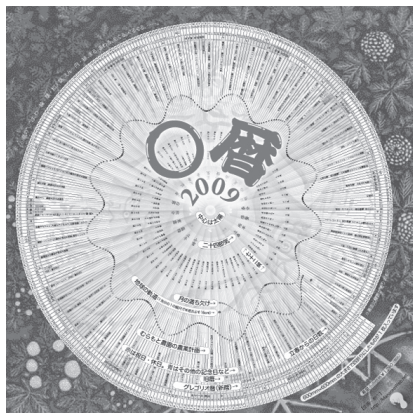
まなていのカレンダーも今回で5年目になりました。

そもそものきっかけは松村賢治氏の著書『旧暦と暮らす スローライフの知恵ごよみ』で旧暦の魅力にとりつかれ、旧暦を知れば知るほど、自然環境や根本を見直すことの大切さが見えてきました。以前から自然環境や平和問題に関心を持っていたのですが、そのことをより心地よく伝えられないだろうかと考えていました。“自然環境を守ろう”“平和が大切”と、がんばればがんばるほど、逆に遠ざかるもの、失うものを感じていました。そのようななか、暦を知ること、暦を通して人と向き合うことで“対立”がなくなっていく思いがしました。

そこで、4年前よりオリジナル・カレンダーの取り組みをしてきました。制作・販売の立場から卓上タイプをつくってきました。2年目の時には、A1判のポスターサイズ『七十二候カレンダー』というのもつくりました。一貫したコンセプトとして、現在使われているグレゴリオ暦に旧暦と日々の月の満ち欠けを重ねるというデザインスタイルをとってきました。

まなていのこれまでのカレンダーの作り方の基本として、現在のグレゴリオ暦を無視することなく旧暦(太陰太陽暦)もみることができ、日常の生活からかけ離れることなく自然に季節感を取り戻すことができるものと考え続けてきました。今回は『地球暦』と『丸一年カレンダー』という素晴らしい暦と出会い、まなていとしてもステップアップした暦をつくることができました。

およそ2年前、富田貴史さんと出会い、ワークショップではじめて暦師・杉山開知さんの『球暦』を手に入れました。それまで旧暦の特に月の満ち欠けにばかり目が向いていましたが、太陽のまわりを地球が回ることから、“時間を分ける”という発想に立つこと。昼と夜の時間の变化から春



○暦 2009

希望小売価格 1,260円(税込)

分・秋分・夏至・冬至と4分割するところから始まり、その中間の立春・立夏・立秋・立冬に分ける。暦の原点にふれた感じで、そのシンプルさのなかに根本概念が詰め込まれているという印象を受けました。また『地球暦』は、太陽、地球、月だけでなく太陽系の他の惑星の位置も載っており、時間に対する考えがさらに進化していることには驚きです。

そして昨年、こよみ屋さん (<http://www.koyomiya.com>) の『丸一年カレンダー』に出会い、衝撃を受けました。カレンダーといえば“日月火水木金土”と横に並び、4、5週間が縦に並んで1ヵ月、それが12ヵ月で1年、一般にはどのカレンダーもそれがあたりまえですが、もっと原点に帰った表現に感銘を受けました。また、月・日・曜日・祝祭日だけではなく、干支、九星、六曜、十二直、二十七宿、太陰暦、雑節、二十四節気・七十二候など暦に関する情報がたいへん充実していて、まだまだ自分も学んでいかなければならないことがあると思いました。

杉山開知さん、および、こよみ屋さんの暦づくりに対する取り組みには尊敬の念を抱いております。

さて、まなていの『○暦』ですが、上記2つの暦を参考に自分なりに考え、自分が表現しえる範囲での情報を選び、独自のデザイン、そして地域性をだすように考えました。

中心を太陽と想定し、大きな季節の分類から段々に細くなるような流れにしました。中心の一番近くに四季(土用)、七十二候、月の満ち欠け、農作業計画、祝祭日、記念日、最外周で旧暦(朔・上弦・望・下弦)・グレゴリオ暦を記載しました。

グレゴリオ暦と旧暦とをどちらも並行して観ることができるようするためと、来年は19年に7回入る閏月の年のため、365日より長くなり、それを表現するのに螺旋状にしたのが大きな特徴です。惑星の軌道は円(楕円)なので、時間軸を加え螺旋で表現したいならば、上に登っていく立体的なものが理想なのでしょうが、2次元の紙の上では“上”を“外”に読み替えて表現しました。

もうひとつ大きな特徴として「農作業計画」を載せたことです。一般的にしなければならない農作業を書こうとすると、地域の気候、標高差で共通したものが表せません。あるひとりの農家(長崎県鹿町町在住の邑本太一さん)の1年間の計画を一例として紹介させていただきました。利用される方がご自分の作業を書き込んだりされることにより「自分の暦」に発展させ



ていられることを望んでいます。

背後と周辺の絵は、今年のカレンダー(『月の巡り』卓上カレンダー)の絵と同じく、石の彫刻家、坂本浩人さんによるものです。「暦は外に向けて拡がっているのに、文字は内向き」と言われ、なるほどと気づき、原則として文字は中心から外に向けて読む方向にしています。

内部の絵には上下がありますが、暦としては利用される方の自由で、基本的にはどの向きに使ってもいいようデザインにしました。時計の感覚で、スタートが12時の位置が見やすいとの意見もありましたが、陰陽の考え方から夏至を上にししました。ですからグレゴリオ暦2009年1月1日の位置が右下の中途半端な位置にあります。

また、2009年1月1日は、旧暦(前年)十二月六日にあたりますので、旧暦十二月を丸々掲載しました。旧暦(当年)十二月廿日は、2010年2月13日までであるので、グレゴリオ暦もそれに合わせて掲載し、2つを並行して読めるようにしました。それにともない月の満ち欠けも同様の期間配置しております。これらも螺旋状にした理由のひとつです。

『地球暦』で基本とされている地球軌道の1兆分の1の縮尺の直径30cmの形を、『○暦』の螺旋軌道では表現できなかったため、青い円をうっすら描くことで『地球暦』からのメッセージも大事に守りたいと思いました。

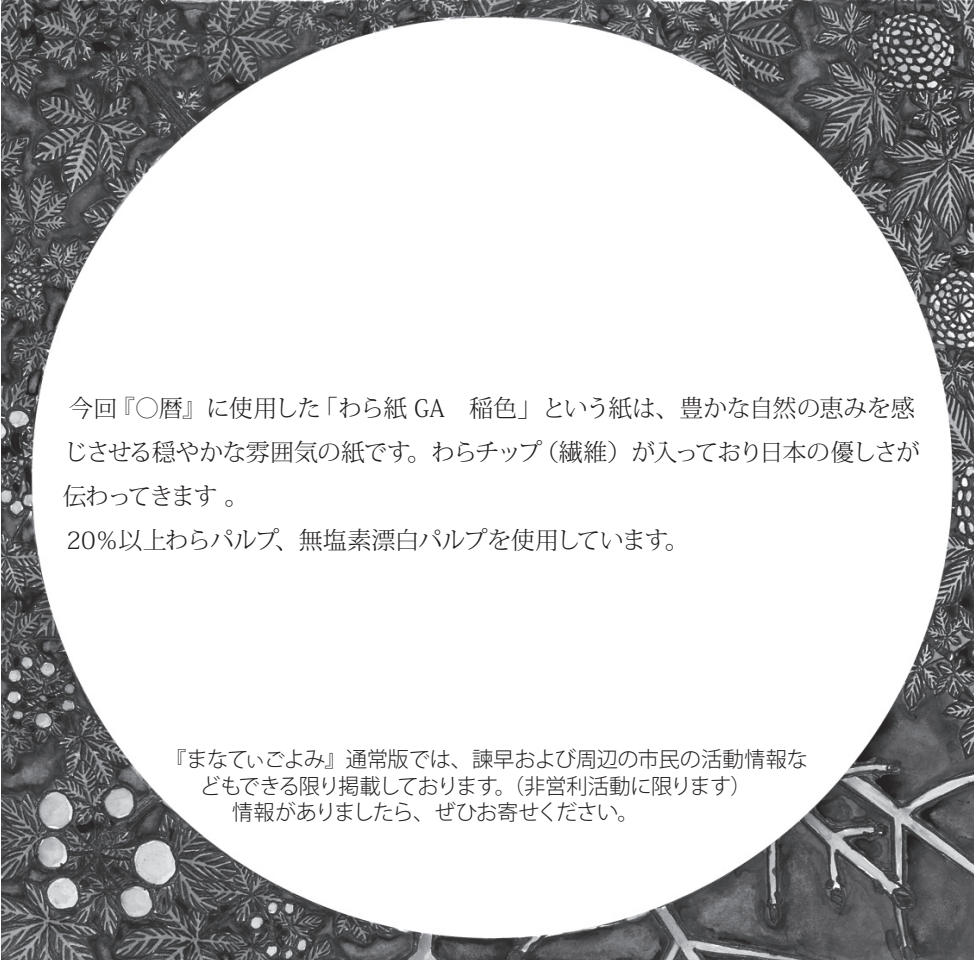
月の満ち欠けの波状の軌道は、『丸一年カレンダー』の特徴でもあります。太陽・地球・月の位置関係から月の満ち欠けが起こる理由を分かりやすく表現できるものであり『○暦』でも使わせていただきました。

このように、暦の原理を守りながら出きる限りオリジナリティを出すことに心がけました。

解説の出典は、杉山開知さんの『地球暦ガイドブック』もしくは『現代こよみ読み解き辞典』からの引用にしました。

まなていの暦が、このようにステップアップすることができたのは、『地球暦』『丸一年カレンダー』のおかげであります。また、きっかけをつくってくださり、アドバイスもいただいた富田貴史さんのおかげでもあります。この場を借りて皆様方に心より感謝申し上げます。

(中央の絵は『○暦』に薄く描かれてる絵を、原画と同様の濃さにしたものです。原画はカラーです)



今回『〇暦』に使用した「わら紙 GA 稲色」という紙は、豊かな自然の恵みを感じさせる穏やかな雰囲気紙です。わらチップ（繊維）が入っており日本の優しさが伝わってきます。

20%以上わらパルプ、無塩素漂白パルプを使用しています。

『まなていごよみ』通常版では、諫早および周辺の市民の活動情報などできる限り掲載しております。（非営利活動に限ります）
情報がありましたら、ぜひお寄せください。

“まなてい”のオシゴト

- 印刷・ウェブサイトの企画・編集・制作
 - 広報、会報、ミニコミづくりの編集講座講師、アドバイザー
 - パソコンの家庭教師
 - 『いのちいっぱい生ゴミリサイクル』、『新暦・旧暦・月の満ち欠けカレンダー』発行、『絵本 日本国憲法前文』企画・編集
- そして…年刊「ながさき七十二候手帳」(仮称)の出版を予定。

“まなてい”の名前の由来

おもに大西洋に棲息する哺乳動物海牛類“マナティ”の人生観(?)に共感して。マナティは、草食動物で、海藻を主食とするベジタリアン。肉食をしないので、他の動物を攻撃しない平和主義者。でも、好奇心、冒険心もあるようです。体形的に速く泳ぐのは不得意。そのスピードを求めないライフスタイルが、グ〜〜〜!!。